

終わる世界の中空散歩

わわわわ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

めちやくちやになった地球を琴葉姉妹がラジオ放送しながら歩くだけのお話。

けど、情景描写があまりにも難しかったので会話文のみ。

目次

終わる世界の中空散歩

「火星の皆さん聞こえますか？こちらVOICEROID・タイプG
emini・No2 琴葉 葵です。おはようございます。こんにち
わ。こんばんわ。いつてらっしゃい。おかえりなさい。頑張ってく
ださい。お疲れ様でした。また明日。これを聞いている人たちが心
安らかに過ごせますよう祈っています」

「葵、長いで」

「しつ、黙って。えっと、本日は緯度一一一軽度一一一旧アメリカのオ
レゴン州あたりからお送りします」

「はよ行こやー」

「お姉ちゃん！ちゃんと挨拶して！」

「ええー、もーええやん。これで何回目の放送やと思ってるん？もう
聞き飽きたやろ？なあみんな？……………まあ聞いても返事は返ってこ
んけどなー」

「お姉ちゃん……………」

「あー、わかったから。泣きそうな顔せんといてえな、そんな機能ない
やろ？」

「泣いてない！」

「はいはい……………ほなうちはVOICEROID・タイプGemini・No1琴葉 茜や。今日も一日よろしゅうなー」

「では、今日も琴葉姉妹、行ってきます」

「……………」

「……………」

「挨拶終了」

「今日はどっちいくん？」

「決まってるないよ」

「やったらいつもどおり、せーので決めよか」

「せーの」

「西」「南」

「西南だね」

「西南かー海に近づくなあー」
「そうだね。けどまだまだ遠いよ？」
「せやなー。うちら最近避けとったもんなー」
「まあ、あんなことがあったもんね」
「二人一緒に食べられた話なー」
「あれはひどかったね」
「けどあれやん。あのでっかい魚のお腹の中に、一つの生態系が出来てたんはびっくりしたなー」
「ほんと、魚のお腹の中なんて、信じられないくらい綺麗だったよ」
「絶滅しとった生物もいっぱいおったしなー」
「クジャク！クジャクが綺麗だった！」
「うちは珊瑚が好きやったなー」
「お姉ちゃん、よく寝る前に写真見返してるもんね」
「それは葵もやん」
「あはは、いっしょだね」
「せやなっ」
「……………」
「……………」
「けど、それも結局火星に送られたしなー」
「いいことじゃん。私達が見つけた資源が、火星の人達の生活に役立ってるんだよ？」
「その結果また地球さんが怒って地殻変動が起きたで？」
「それは…」
「まあ、稼働できてるし儲けもんやけどな」
「……………それより、こちら辺重力めちやくちやだね」
「せやなー。お陰で体が軽いわ」
「私未だに慣れないよ、浮いてる足場って」
「ほんま？アトラクションみたいで楽しいやん」
「どこが!?!浮いてる岩場を、重力がめちやくちやな状況で跳んで渡って行くアトラクションなんて、誰も見向きもしないよ！」
「火星の人達もこっち来てやってみればハマるんちゃう？」

「絶対無い！それにそもそも人間はここに来れないでしょ？ここら辺、酸素無いし」

「アルゴン77%！」

「残りは一酸化炭素と窒素だつて」

「意味わからんわ」

「重力場がいくつもあるほうが意味不明だよ」

「びよいんびよいん跳ねれるからええやん」

「よくない！重力場は目に見えないから、目に見えるもので判断しないといけないのが面倒」

「えー、ぱつと見てわかるやん」

「そんなのお姉ちゃんだけだよ」

「こつがあんねん。例えばあつちの方のあの岩」

「うん」

「あの岩の付近に重力場が二つあるから、重心の位置があそこにあんねんな。それで上の方に引っ張る力が強いから、こつち向かって反つてんねん。あんだけわかりやすいと、岩の質量と重心の位置から、二方向の重力差が計算できるから、後は一番安定しとるところに着地するだけやね」

「……………」

「他にはああいう水平になつてる平たい岩は注意やな。宙に浮いとるんやから、一応重力の釣り合いは取れとる。やけどどんだけの太さで、どの方向に引っ張つとるんかわからんから、なるべく真ん中付近に着地する事。端っこ過ぎたら岩ごとひっくり返るで？」

「ごめん、何一つ伝わらない」

「そうか、それやったらお姉ちゃんの後、ついてき」

「うん」

「こつから落ちたらどうなるんやろな？」

「あつちこつちの重量場に引っ張られて、くるくる回つた後、一番大きな力を持つてる岩場に叩きつけられるよ」

「うそやん！なんでそんな事知つとるん？葵？」

「昔お姉ちゃんが好奇心に釣られて落ちたからでしょ！」

「そんなん覚えてへんわ」
「どうして忘れられるの!? 確かにお姉ちゃん気絶してたけど、私達が起きた事を忘れるわけないでしょ!？」
「ロボットやしな。多分データ漁ったらどっかにあると思うんやけど面倒やしなー」
「相変わらず適当だね」
「それがうちや」
「胸張らないで」
「エツヘン」
「ドヤ顔禁止」
「葵はかわええなー」
「誤魔化すのも禁止! まったく、その適当さで私がどれだけ苦勞してるよ」
「けど葵かって音声届けてへん時、結構適当やん」
「へっ?」
「この前やって資源あつたのに、見向きもせえへんと逆さに登ってく滝見ではしゃいでたやん」
「ばっ!?! ちよつとお!」
「そんで、はしやぎまくって滝に近づいたと思つたら河童に……」
「わー!! わあああー!! しゆ、終了! 今日の放送! 終了!!」
「あはは、やって?」
「も、もう充電もないしい! ご飯食べてスリープモードに入らないと! だから今日はここまで!!」
「しやあないなあ? みんな、堪忍な」
「お姉ちゃん!」
「はいはい、それじゃあ…さいなら」
「ま、また明日!」